

古代遺跡発掘地と現代地名要素との相関関係

——岡山県南域の発掘地名を対象に——

十 河 直 樹

1 はじめにー動機ー

- 1) 昭和63年4月10日に、世紀の大プロジェクトである「瀬戸大橋」（本州四国連絡橋児島坂出ルート）が開通する。

この工事が着手されたのは、昭和55年10月である。すなわち、9年に余る歳月を経た国の大事業の一であった。

- 2) この工事には、種々の難問題があったが、その一つ、備讃瀬戸に点在する島嶼の中に古代人の残した遺跡のある点である。私（十河）は、この遺跡の発掘地とその発掘地名との間には何等かの共通した要素があるのではなかろうか。素朴な疑問が生じた。そこで、岡山県南域に焦点を当てて調査・研究することとした。

- 3) すなわち、この研究は、岡山県南域に散布している古代遺跡とその発掘地との間に何らかの関係が有はしないか。遺跡発掘地と古代人とが生活したこととの間には、ある意味で大変長大な時間差があるからである。

ただ、要素として考えられる点は、

- ①自然条件に恵まれていたこと

- ②狩猟漁撈生活をする上に適していた地域であったこと

- ③①②の条件を踏まえて、早期から定住することが可能であったこと

- ④こうした、基礎的な生活条件・環境の中で、「社会」形成を営んでいったということがいえそうである。

- 4) しかし、人が定住し生活したとしても、その地に「地名」を附したかどうか疑問である。推定ではあるが、その地に「呼名(地名)」を附し、なんらかの生活との関りを持たせるようになったのは、ずいぶん時間のたつてのこととなろう。〈生活と地名との次元の差〉

ただ、まったくの冒險的な発想・考察ではなかろう。人が死生を繰り返しても、大地にそれほど大した変化があったとは考えられないからである。

そこで、これまで考古学上発掘された、岡山県南域の古代遺跡15地点の土出遺品とその地名との関係要素とを言語学的な立場に立って、どこまで究明・解析することがができるか。その究明に意味が有るか無いか。研究の手を染めてみることにした。

2 岡山県先土器時代遺跡分類表・分布図

先土器主要遺跡分類表

地 名	現行政地	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	〇の数
1 鷺羽山	倉敷市児島	0	0	0		0	0	0			6
2 堅場島	倉敷市児島		0		0	0	0				4
3 宮田山	玉野市渋川		0					0			2
4 羽 島	倉敷市						0				1
5 田 井	玉野市		0								1
6 大入崎	玉野市		0				0				2
7 犬戾鼻	玉野市		0								1
8 戸津田	倉敷市林								0		1
9 王子ヶ岳	倉敷市児島		0								1
10仙髄山	倉敷市児島		0								1
11宮ノ鼻	倉敷市児島		0								1
12釜 島	倉敷市児島			0		0	0				3
13高 島	笠岡市		0								1
14田の浦	笠岡市		0								1
15明地島	笠岡市		0							0	2
	〇の数	1	12	2	1	3	5	2	1	1	28

★

○ ●

①刃器状剥片

②ナイフ形石器

③尖頭器

④羽状剥片

⑤細刃器

⑥細石核

⑦削 器

⑧舟底形石片

⑨彫 器

★上記の表は、記下の書籍によって、十河が表示した。

『日本の考古学 I 先土器時代』（全7巻）杉原荘介編 A5判 447頁

昭和40年5月15日 初版発行

昭和42年9月10日 4版発行

の所収の内、

「日本先土器時代主要遺跡地名表」 9頁【岡山県】を採録した。

3 発掘遺物・言語学的解析・推定年代表

	1			2				3				語
	遺 物			地 形				音 形				
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
	ナイフ形石器	細刃器	細石器	見はらし・景観良	底地・干潟	昔島・現在陸地	高地	=タ= =サキ =ハナ	=シマ =ヤマ	=ダケ =ヤマ	□+○+□	
●倉敷市												
1 鷲羽山	0	0	0	0			0				0	
2 堅場島	0	0	0	0			0	0		0		
4 羽 島			0	0	0	0				0		
8 戸津田				0	0			0				
9 王子ヶ岳	0			0			0				0	
10 仙髄山	0			0			0				0	
11 宮ノ鼻	0			0			0		0			
12 釜 島		0	0	0			0			0		
●玉野市												
3 宮田山	0			0			0	0			0	
6 大入崎	0		0	0	0				0			0
7 犬戻鼻	0			0	0				0			0
5 田 井	0			0	0			0				
●笠岡市												
13 高 島	0			0		0	0	0		0		
14 田の浦	0			0	0			0				
15 明地島	0			0		0				0		
0の数	12	3	5	15	6	3	8	6	3	5	4	2
	★			★			★	★		★		
	45%			53%				30%				

4		5							6				0の数
形	成	用 字							推 定 命 名 年 代				
13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
						鼻 崎							
○+□	○+助+□	鳥 犬	宮	山岳	田畑	浦	島	古代	中世	近世	現代		
0		0		0							0	10 42%	
0							0			0		10 42%	
0							0	0				8 33%	
					0			0		0		6 25%	
				0							0	6 25%	
0				0						0		7 29%	
	0		0			0		0				8 33%	
				0			0		0			8 33%	
0			0	0	0			0				10 42%	
						0			0			8 33%	
		0				0					0	8 33%	
					0			0				6 25%	
0				0			0					9 38%	
	0				0	0		0				8 33%	
0							0				0	7 29%	
7	2	2	2	6	4	4	5	6	2	3	4	119	
★				★				★					
24%				26%				25%					

4 各地名の共通比率度

42%	38%	33%	29%	25%
1・2・3	13	4・6・7	10・15	5・8・9
4/15		11・12・14		

2/3

1/3

	1	2	3	4	5	6	
	1	4	8	13	17	21	
1 鷺羽山	0	0		0	0		4
2 壺場島	0	0	0	0			4
3 宮田山	0	0	0	0	0	0	6
13 高 島	0	0	0	0	0		5
4 羽 島		0		0		0	3
11 宮の鼻	0	0				0	3
12 釜 島		0			0		2
6 大入崎	0	0					2
7 犬戾鼻	0	0	0				3
14 田の浦	0	0	0			0	4
	8	10	5	5	4	4	36

60

地名	要素
3 宮田山	ナイフ形石器
13 高 島	見晴らし・景観良
	=タ= -ta-
1 鷺羽山	○+□
2 壺場島	山岳
14 田の浦	古代

5 むすび

1) 「はじめに一動機」の項ですでに、述べているように、そこに土地が有ることと地名が付されたということとは、別の次元のことである。しかし、その土地が、生活する上に、重要な土地であれば、なにがしかの目印・環境に対する配慮をなすであろう。しかし、推定の域を脱し得ない。

2) ただ、人間が生活を基盤として生きていく過程の絶対条件というものがある。

1 衣食住の、とりわけ容易なこと。

まず、食糧確保・保存・永続性のある地（環境）。身は、寒暖から調節出来やすい地。住は、四季を通じて変化の少ない、豪雨・ひでりなど天災がほとんどない地。

2 大河・内海など、人が行動するのに、容易にできたこと。

丸太、筏、舟・徒歩などで、物を運搬するのにたやすかったこと。

3 定住という点から考察すると

食糧の確保が絶対であること。寒暖に格差が激しくないこと。

3) これら基礎的な条件を基に、人は「社会」を形成していく。

1 すなわち、音と文字を用いて名を付す。その地名は生活に必要な位置を定めるためのものとしてであろう。すなわち、利地名である。

2 人の社会に身分・財産の貧富の差異が生ずると、広大な土地を権力によって所有したがる。すなわち、治地名が生れる。

3 やがて、生活にゆとりが生じると、四季や、花鳥風月に人はよい、僅かな土地の名にも、重い深い意味を持たせた、親地名を付す。

4) 時代地名の条件

1 古代＝生活地が、山岳・海浜・海辺・浜辺、低地であることから、サン、ザン、シタ、アチ、シカタ、ヒガタなどの音が有力

2 中世＝生活に貧富の差異、身分に上下などの社会的な権力姿勢による、有地名と無地名の差を明確にした。タ、～ベ、ハブ、～ブ、～トリデ。

3 近世＝商人、人の行動が激しくなったことで、似た地名が各地に発祥。利地名の隆盛。～ハナ、サガノ、～ミサキ、イヌ～、～バヤシ。

4 現代＝土地の改革、山河を削り開墾。河川を埋め立て干拓拡張。～シンデン、〇〇カンタク、～バンハナ

5) 土地と地名

土地は自然が改革し自然が消滅していたのが、今までの歴史であった。しかし、現代では、人の力で山に空洞をあけ、海を埋め立て、山河を削り、一夜にして、平坦な土地を造りあげる。これは、偉大なことであり、恐怖につながる行為であろう。そこに、安易な地名を付し、仮の家屋を建設する。自然の猛威を忘れているかのようにである。土地と地名と人間とは、そこに住む人の深さに比例するように考えられる。